# 博士課程教育リーディングプログラム　平成23年度採択プログラム
# 事後評価結果一覧

| 類型 | 整理番号 | プログラム名 | 機関名 | プログラムコーディネーター名 | 総括評価 | ＜参考＞中間評価結果 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| オールラウンド型 | A01 | 京都大学大学院思修館 | 京都大学 | 川井　秀一 | A | B |
| | A02 | 超域イノベーション博士課程プログラム | 大阪大学 | 藤田　喜久雄 | A | A |
| | A03 | 超成熟社会発展のサイエンス | 慶應義塾大学 | 神成　文彦 | A | A |
| 複合領域型（環境） | B01 | サステイナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム | 東京大学 | 味埜　俊 | B | B |
| | B02 | 環境エネルギー協創教育院 | 東京工業大学 | 波多野　睦子 | S | S |
| | B03 | グリーン自然科学国際教育研究プログラム | 名古屋大学 | 阿波賀　邦夫 | S | B |
| | B04 | グローバル環境システムリーダープログラム | 慶應義塾大学 | 清木　康 | A | S |
| 複合領域型（生命健康） | C01 | ヒューマンバイオロジー学位プログラム | 筑波大学 | 渋谷　彰 | S | A |
| | C02 | ライフイノベーションを先導するリーダー養成プログラム | 東京大学 | 岩坪　威 | A | B |
| | C03 | 情報生命博士教育院 | 東京工業大学 | 秋山　泰 | A | A |
| | C04 | 生体統御ネットワーク医学教育プログラム | 大阪大学 | 竹田　潔 | A | B |
| 複合領域型（安全安心） | D01 | グローバル生存学大学院連携プログラム | 京都大学 | 寶　馨 | B | B |
| 複合領域型（横断的テーマ） | E01 | フォトンサイエンス・リーディング大学院 | 東京大学 | 相原　博昭 | S | S |
| | E02 | 放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム | 広島大学 | 小林　正夫 | A | A |
| オンリーワン型 | F01 | One Healthに貢献する獣医科学グローバルリーダー育成プログラム | 北海道大学 | 堀内　基広 | A | A |
| | F02 | 重粒子線医工学グローバルリーダー養成プログラム | 群馬大学 | 中野　隆史 | A | A |
| | F03 | グローバル原子力安全・セキュリティ・エージェント養成 | 東京工業大学 | 齊藤　正樹 | A | A |
| | F04 | グリーンエネルギー変換工学 | 山梨大学 | 内田　裕之 | A | A |
| | F05 | 法制度設計・国際的制度移植専門家の養成プログラム | 名古屋大学 | 松浦　好治 | A | B |
| | F06 | フォトンサイエンスが拓く次世代ピコバイオロジー | 兵庫県立大学 | 大隅　隆 | B | B |

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 大阪大学 | | 整理番号 | A02 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | 超域イノベーション博士課程プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 小林 傳司 | プログラムコーディネーター | 藤田 喜久雄 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、（１）インターンシップ等により、個人、社会、グローバル、地域を横断する社会課題の現場に赴いて挑み、解決を考えさせる実践体験の仕組み、（２）企業や自治体等から提供されたプロジェクトにより、社会が直面する問題を考えさせる演習等を通じ、専門性の深さを確保しながら俯瞰力及び超域力を身に付けた学生を育てようとする試み、（３）平成29年度までの履修生全体で見ると文理がほぼ同数（文44名、理54名）であり、本プログラムで謳う文理融合が学生構成面でも実現できている点、（４）大多数の学生が本プログラムに対する満足感を表明している点等は評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、（１）社会の一員として自分の立場を広く捉え、自分の専門性や経験を社会で生かしたいという意識を持つ学生が育ち、多面的な見方、俯瞰力、グローバルリーダーとしての成長の実現性等が高まっている点、（２）修了者の就職先は民間企業３名、大学関係２名とバランスが取れており、本プログラムを途中離脱せざるを得なかった者もアカデミアに閉じこもることなく、広い視野が求められる活動に従事している点は、オールラウンド型の人材育成の成果が社会に認められたものとして評価できる。なお、今後は修了者の国際機関等、海外への進出も期待される。

事業の定着・発展については、本プログラムが学長直轄の「未来戦略機構」の一つに位置付けられ、大阪大学の他の４つの博士課程教育リーディングプログラムとともに、「国際共創大学院構想」に基づいて継続と発展を図ろうとしていることは評価できる。しかし、本プログラムの支援期間終了と新構想の発足の間にある新規学生の採用を行わない１年間の空白期間を解消するため、今後一層の検討が求められる。

# 事後評価結果案に対する意見申立て及び対応

| 機　　関　　名 | 大阪大学 | | 整理番号 | A02 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | 超域イノベーション博士課程プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 小林 傳司 | プログラムコーディネーター | 藤田 喜久雄 | |

| 意見申立て内容 | 意見申立てへの対応 |
|---|---|
| 【申立て箇所】<br>（第三段落　3行目～4行目）<br><br>しかし、本プログラムの支援期間終了と新構想の発足の間にある1年間の空白期間を解消するため、今後一層の検討が求められる。<br><br>【意見及び理由】<br>上記の文章は、プログラムでの教育活動全般に「1年間の空白期間」があるように解釈されかねない。<br>既に在籍している履修生への教育については、事後評価調書の23ページの31行目から32行目の箇所および40ページの20行目からの段落に明記しているとおり、大学独自の経費により確実に継続していくことから空白期間は生じない。<br>新規の履修生の受入れについても、事後評価調書の23ページの32行目から33行目の箇所および41ページの35行目からの段落に明記しているとおり、卓越大学院プログラムに向けた構想を検討中であり、首尾よく初年度に採択されれば、平成30年度の中盤での履修生の受入れは可能であり、それにより遅れる期間は半年ほどになると見積もっている。 | 【対応】<br>以下のとおり修正する。<br><br>しかし、本プログラムの支援期間終了と新構想の発足の間にある新規学生の採用を行わない1年間の空白期間を解消するため、今後一層の検討が求められる。<br><br>【理由】<br>現段階として新構想の発足に向けて着手しているものの、新規学生の採用を行わないとのことから、空白期間が生じると判断した。<br>なお、既に在籍している履修生への教育について言及する意図はないため、申立てを踏まえ、「1年間の空白期間」の内容が明確となるよう、上記のとおり文言を追加する。 |

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 東京大学 | | 整理番号 | B01 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | サステイナビリティ学グローバルリーダー養成大学院プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 三谷　啓志 | プログラムコーディネーター | 味埜　俊 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

概ね計画に沿った取組が行われ、一部で十分な成果がまだ得られていない点もあるが、本事業の目的をある程度は達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、英語のみで実施される学位プログラムを構築し、全学的な大学院教育改革の一環としてプログラムが実施され、学内のマネジメント体制が整備されていることは、教育現場の国際化への取組として高く評価できる。一方、日本人学生のプログラム参加者が少なく、日本人学生が海外で実習や研究を行う体制の整備が遅れていることについては更なる強化が望まれる。また、学位の質保証のために厳しい QE を行い、進学者数を絞り込むというカリキュラム設計であったものの、修士課程入学者の博士課程進学率が 29.7%(平成 24～26 年度入学)に留まっており、修士課程から一貫してグローバルな環境において育成する体制が十分に構築されているとは言い難い点については、今後一層の努力が求められる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、①国内外でのインターンシップ参加の機会が少なく、各界のリーダーとしてグローバルに活躍するキャリアパスにつながる就職を支援する体制が整っているとは言えない点、また、②多くの留学生と日本人学生の交流を活性化することが必要である点、③修了者を含む学生の活躍状況の把握についても、一般的な手法の列挙に留まっている点については、今後一層の努力が求められる。

事業の定着・発展については、学長のリーダーシップ体制の下、本プログラム専任教員の配置を行うとともに、本プログラムの安定的継続を予定していることは評価できる。しかし、東京大学として「サステイナビリティ学国際卓越大学院（仮称）」への展開以外には、特筆すべき本プログラム自体の定着・支援方策がとられているとは見なし難い。学外の連携先機関、特に国際機関との外部連携の継続について、更に強化していくことが期待される。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 東京工業大学 | | 整理番号 | B02 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | 環境エネルギー協創教育院 | | | |
| プログラム責任者 | 岸本　喜久雄 | プログラムコーディネーター | 波多野　睦子 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、学長の強いリーダーシップの下、①異分野協創教育、②産官学協創教育、③国際連携協創教育の３つのプログラムを軸に、特に、①異分野協創教育に対しては計画を超えた取組であり、広範かつ一貫した教育・研究体系を築くことに成功した点は評価できる。特に、研究室ローテーション等が有効に機能する一方、官界・産業界からの講師の招聘により、政策、経営に関する講義も強化され、広い視野を持ったリーダーの育成に成功した。加えて、国際フォーラムへの参加やインターンシップ制度・海外メンター制度を通してグローバルリーダーを育てるシステムを構築した点も高く評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、俯瞰力や独創力を向上させる教育上の工夫を随所に行い、産業界もリーダーとしての俯瞰力やその活用力の成長を認めるまでとなった。こうして、修了者の 66%（29 名中 19 名）が企業に就職する実績をあげた点は評価できる。特に、環境エネルギー分野の幅広い専門力の習得・強化を促すだけでなく、実践的な課題解決力を強化するプログラム（例えば自主設定論文）等がキャリアパスの構築に有効に機能した点も当初の計画以上の成果であり、評価できる。インターンシップ制度や国際フォーラムの参加等によって構築された幅広い人的ネットワークが、国際的なネットワークへと発展することが期待される。

事業の定着・発展については、プログラム採択当初は 23 専攻の参加だったものが 25 専攻にまで拡大・発展し、さらに、平成 28 年度の教育改革によって教育組織が発展的に再編され、極めて充実したプログラムとなった点は評価できる。支援期間終了後は、新設される「リーダーシップ教育院」が博士リーダーシップ教育を引き継ぎ、研究組織については、「科学技術創成研究院」が平成 28 年４月に新たに設置されるなど、事業の着実な定着・発展が期待される。経済的支援については、産業界との包括契約や寄附講座の設置等の支援、加えて大学独自の奨学金制度の創設等の検討が進められている点も含め、当初の計画以上の成果となったことは評価できる。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 名古屋大学 | | 整理番号 | B03 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | グリーン自然科学国際教育研究プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 前島　正義 | プログラムコーディネーター | 阿波賀　邦夫 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、プログラム学生の自主性を重んじつつ切磋琢磨させるという方針の下、優れた学位プログラムに加えて、俯瞰力、展開力、国際性、リーダーシップ力を養うとともに、学生の人的ネットワーク構築に寄与する多様なプログラムを提供し、常時200～250名の参加学生を確保して82名の修了者（平成29年9月末時点）を輩出したことは高く評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、産業界に職を得た者が修了者の半数以上を占め、海外の研究職に就いた者や起業した者もいるなど、学位取得後の進路が従来に比べて大きく広がった点は高く評価できる。事業実施前には、アカデミアの進路として約33%の学生が名古屋大学に留まっていたのに対し、本プログラムの修了者では10%以下になったことも高く評価できる。また、日本学術振興会育志賞受賞者3名をはじめ、研究面で顕彰された修了者もおり、就職先からの評価も高い。NEDO主催の最優秀賞を受賞し、起業した女子学生もいるなど、「女性トップリーダー育成合宿」の取組の成果が得られていることも評価できる。これらのことから、本プログラムは、質・量の両面で当初の計画で期待された以上の成果をあげたと言える。なお、支援期間後半で認められた目覚ましい進捗と優れた成果には、中間評価後、プログラムに加わる教員・メンターの事業への理解の深化が少なからず寄与したものと言える。

事業の定着・発展については、本プログラムにより、大学内外の教育力を有機的に結びつけて効果的に活用することで、教員が過大な負担を負うことなく、「学位論文の質の向上」と「多様な分野への輩出」を相乗的に両立させることができることを証明した。その意味で、本プログラムでの試みは、その特筆すべきサイズ効果（費用対便益の大きさ）も含めて、今後の大学院教育を構想する上での有用なモデルの一つとなりうると思われる。また、支援期間終了後の主要なプログラム内容の継続に関して、具体的で現実的な計画が立てられていること、事業で得られた経験と成果を将来に生かす大学全体としての体制と計画が構築されつつあることも高く評価できる。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 慶應義塾大学 | | 整理番号 | B04 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | グローバル環境システムリーダープログラム | | | |
| プログラム責任者 | 青山　藤詞郎 | プログラムコーディネーター | 清木　康 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、具体的な環境問題に即して、メジャー（主専攻分野）とマイナー（副専攻分野）が選択され、研究科及び教員間の有機的な連携が図られ、文理融合型のグローバル環境システムリーダー育成を行う実効的な学位プログラムが構築されている。海外の連携・提携機関に修士時で３カ月間、博士時で原則として６カ月間渡航する国際トレーニング制度や遠隔コラボレーションシステムによる高いレベルの教育研究環境が整備されている。また、メジャー研究について所属研究科の学位取得基準を満たすこと以外に、「国際トレーニング成果発表」や国際会議での２回以上の英語による発表が求められており、学位の質の保証がなされていることは、十分評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、日本学術振興会育志賞や国際学会でのBest Paper Award 等の受賞者を多数輩出しており、本プログラム学生を著者とする国際共著論文が 68 件にも及んでおり、年々増加している。その成果を基に、海外を含む大学、国際的な企業等に修了者の多くが就職（国内大学５名、国内企業１名、海外大学２名、海外企業１名）し、グローバル環境システムリーダーの人的ネットワークが構築されつつあることは、十分評価できる。15 名の平成 29 年度修了予定者については、着実に学位が取得できるように、更なる指導への尽力が期待される。

事業の定着・発展については、慶應義塾大学塾長のリーダーシップ体制の下、本プログラム合同運営委員会及び外部評価委員会を設置して本取組の成果を毎年評価するとともに、本プログラムを将来も常設の教育コースとして定着させる計画となっている。また、そのための経済的支援策として、大学独自の給付型奨学金、学生向け研究支援基金の支援策が継続され、将来にわたって本プログラムの趣旨に沿った人材が輩出されることが期待されることは、十分評価できる。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 筑波大学 | | 整理番号 | C01 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | ヒューマンバイオロジー学位プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 清水　諭 | プログラムコーディネーター | 渋谷　彰 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、日本人学生及び留学生に対し、非常に行き届いた学習及び生活の指導を組織的・計画的に実現し、これを学生寮（インターナショナルドミトリー）における学生相互の協力、学生とメンターの相互交流等を通じて実質化するなど、学際性、国際性に富む、計画を超えた非常に優れた取組である。また、多数の海外拠点との協力、留学生の高い比率を活かし、海外ラボローテーションによる複数回の海外アカデミアでの研究やインターンシップを通じてグローバル人材の育成が実現しており、このような環境下で、俯瞰力や独創性を身に着けた学生が育ったと認められ、高く評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、第一期の修了者が海外のアカデミアに羽ばたき、第二期では、企業への就職も半数に及ぶ見込みであるなど、本プログラムが意図した博士人材の多様な進路とキャリアパスが実現されており、学生各自の専門分野における研究でも優れた成果をあげているなど、博士課程教育リーディングプログラムのカリキュラムの成果として高く評価できる。

事業の定着・発展については、既に事業の実施中に全学を挙げた組織改革として、「グローバル教育院」を設置し、学長のリーダーシップの下に、全学的な大学院改革が実現しつつある。支援期間終了後は、筑波大学の全ての博士課程教育リーディングプログラムを含む複数の学位プログラムが１つの制度の下に収められ、本プログラム特有のグローバルリーダー養成という性質が薄れる懸念はあるものの、学生への経済的支援については、給付額は減少するが、大学の独自資金により継続することが約束されており、第３期中期目標においても、博士課程教育リーディングプログラムの実施の経験と反省点に基づく継続的な改革が掲げられており、定着・発展の方向が明示されている点等は高く評価できる。また、グローバルリーダーの輩出について、特に、留学生と日本人学生の比率の改善や民間企業への進出等については、より一層の努力が必要であるが、事業実施の成果が将来においても維持され、大学全体の発展に継続的に反映されることを期待する。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 東京大学 | | 整理番号 | C02 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | ライフイノベーションを先導するリーダー養成プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 宮園　浩平 | プログラムコーディネーター | 岩坪　威 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、医・工・薬・理という幅広い分野からの学生と教員、そして産・官・学・医療機関の第一線で活躍する講師陣の参加の下に、分野横断的・統合的な視野と知識を獲得できる講義・演習が実施された。また、学生に１名ずつ異分野の教員を副指導教員として配置するとともに、学位審査を各専攻での専門性の高い厳しい審査に加えて、副指導教員とそれ以外の２名の審査委員による審査を行うなど、学位の質を保証する体制が構築された。さらに、海外短期留学・短期研修、学生が主体的に企画・運営する全体会議・コロキウムの英語での実施など、グローバルな教育・研究環境が整備され、本プログラムの掲げた目標が達成されたと評価できる。強いて言えば、社会人及び留学生の本プログラムへの参加者数が目標を下回った点は多様性の観点から改善が望まれる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、本プログラム学生の大多数がプログラムによって俯瞰力や独創力等の汎用力の向上を実感しており、また、海外の研究者、本プログラム修了者、他のリーディングプログラム学生等との多様な人的ネットワークの構築にも成功していると感じているなど、概ね評価できる。当初、本プログラム学生の大部分がアカデミア志向であったが、現在では海外でアルツハイマー病診断薬の開発を目指して起業した学生など、産業界をはじめアカデミア以外へ進出した修了者も多く出ており、各界のリーダーとなりうる状況が生まれている。また、メーリングリストの活用やアンケート調査、ニュースレターの配布等を通じて修了者の社会での活躍状況を長期的に把握するシステムが構築されている点も評価できる。

事業の定着・発展については、学長のリーダーシップの下に「東京大学ビジョン 2020」の理念に基づき、平成 29 年度に東京大学として２つの「国際卓越大学院（ライフサイエンス卓越大学院（仮称）及び生体医工学卓越大学院（仮称））」が創設され、本プログラムがこれらの大学院へ移行されることが決定している。その中で、本プログラム学生のコース修了までの経済的支援を保証するとの総長宣言が出されている点は評価できる。今後とも本プログラムの精神と実践の継続・発展を強く要望する。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 東京工業大学 | | 整理番号 | C03 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | 情報生命博士教育院 | | | |
| プログラム責任者 | 三原　久和 | プログラムコーディネーター | 秋山　泰 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、生命系と情報系をまたいだ学位プログラムが構築され、２つの系のいずれかを主専門、他方を副専門とするΓ（ガンマ）型人材の育成を目指した様々な取組が実施された。一部教員の本プログラムへの理解が不足している、博士課程に進学する学生が少ないなどの点はあるものの、本プログラムを担当する教員の適切な配置や学生への経済的支援、当初から非研究者の道を強制せず学生の自主性を尊重して多様な進路を示すなど、大学としてのサポート体制は適切に整えられている。その結果、学生は目的意識を高く持って本プログラムに意欲的に取り組んでおり、高い専門知識と幅広い見識、更にグローバルリーダーの資質を持つΓ型人材が社会に輩出されはじめていることは高く評価できる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、学生のスキルの向上を６軸（リーダーシップ、コミュニケーション力、ビジネス能力、インターンシップ経験、副専門、主専門）で定量的・総合的に自己評価できる仕組みを導入し、コミュニケーション力の向上や国際性を身に着けることを目的とした海外インターンシッププログラムや、学生自身が主体となる各種イベントの実施など、学生の多方面の能力の向上を促す様々な取組が行われた。その結果、学生によるベンチャー企業の創業や多くの修了者が産業界で活躍するなど、当初想定した多様なキャリアパスを歩む人材の育成が進みつつあり、高く評価できる。

事業の定着、発展については、新たに設置される「リーダーシップ教育院」を全学共通のプラットフォームとして、本プログラムによるグローバルリーダー養成教育の諸成果を継続・活用する計画が示されている。しかしながら、「リーダーシップ教育院」の位置付けや内容、現プログラムからの移行プロセスについての具体性に懸念が残ることから、移行にあたっては本プログラムで得られた優れた成果が次期体制に十分に継承されるように配慮していただきたい。特に、奨励金等の学生への経済的支援に関しては懸念が残ることから、これまでと同等の明確かつ合理的な支援が継続されるように、リソースの確保を含めた全学的な努力が求められる。

# 博士課程教育リーディングプログラム　事後評価結果

| 機　　関　　名 | 大阪大学 | | 整理番号 | C04 |
|---|---|---|---|---|
| プログラム名称 | 生体統御ネットワーク医学教育プログラム | | | |
| プログラム責任者 | 金田　安史 | プログラムコーディネーター | 竹田　潔 | |

## 博士課程教育リーディングプログラム委員会における評価

［総括評価］

計画どおりの取組が行われ、成果が得られていることから、本事業の目的を達成できたと評価できる。

［コメント］

リーダーを養成するための学位プログラム、体制等の構築については、前期課程から生命科学の分野間の枠組みを取り払った教育体制と充実した外国語教育が組まれており、さらに、後期課程においても、中間評価結果を踏まえて、更なるグローバルリーダー育成のカリキュラムが組み込まれるとともに、学位審査体制に関しても、グローバルに活躍するリーダーとなるに相応しい資質・能力を保証するシステムが構築されており、十分に評価できる。ただし、企業との連携は強化されているものの、インターンシップ活動は実績が少なく、海外インターンシップも含め、学生のキャリアパス構築にとって重要なインターンシップ制度に関してより一層の充実が望まれる。

修了者の成長とキャリアパスの構築については、現時点では、研究職と別の領域でのキャリアを求めてポストを得ている修了者はごく少数であるが、現在のプログラム学生の中には研究職以外のキャリアを模索している者が少なからずいる。本プログラム開始時点での入学者のほとんどがプログラム修了後に研究職でのキャリアパスを希望していたことを考えれば、本プログラムにおけるグローバルリーダーを目指す意識付けは効果的に機能していると考えられ、十分に評価できる。

事業の定着・発展については、大学として学長のリーダーシップの下、新たに「国際共創大学院」を立ち上げ、本プログラムを含む全ての博士課程教育リーディングプログラムを取り込み、自らの資金によるプログラム継続を考えている点は評価できる。ただし、新たな大学院計画の詳細は決まっておらず、本プログラムが目指しているグローバルリーダー育成のためのプログラムと体制の維持が可能であるかは明確でなく、加えて、特に移行時における財務面での支援計画も具体性に欠けるため、その継続性に不安があるなどの問題も少なからずあることから、今後一層の努力が望まれる。